

## 2年次以降につながる初年次教育

### 報 告 者

木越 康（大谷大学文学部 准教授・学生部長）  
本田康二郎（同志社大学商学部 講師）  
杉谷祐美子（青山学院大学教育人間科学部 准教授）

### コーディネーター

藤枝 真（大谷大学文学部 准教授）

### 概 要

初年次教育におけるアカデミック・ライティングの技法や、資料収集法、ディスカッションによるアイデアの展開などは、大学における学習・研究にとって確かに不可欠なものである。しかしその一方で、初年次教育にはそのような学びのスタイルを習得すること以外の期待もこめられている。具体的にいえば、毎回出席し共同作業するという授業のリズムを他の科目よりも強調することによって、学生間のつながりを深め、大学に定着するきっかけを作るとのことである。しかし、後者への期待が強調されればされるほど、授業の内容ではなく、その場の作業をこなすことだけが注目され、肝心の授業内容は1年次修了と共に忘れてしまったという話も聞こえてくる。両者のバランスをどのようにとるか。実際に学生の力になる初年次教育とは何か。本分科会では、初年次教育を、学生の定着のみならず2年次以降の学びにどのようにつなげることができるかについて、発表者による事例の紹介と分析をもとに検討していく。



## 【第1分科会】

## 2年次以降につながる初年次教育

参加者数 47名

## 分科会報告者

|          |                          |
|----------|--------------------------|
| 第1報告者    | 木越 康（大谷大学文学部 准教授・学生部長）   |
| 第2報告者    | 本田康二郎（同志社大学商学部 講師）       |
| 第3報告者    | 杉谷祐美子（青山学院大学教育人間科学部 准教授） |
| コーディネーター | 藤枝 真（大谷大学文学部 准教授）        |

## ○分科会のねらい：

初年次教育におけるアカデミック・ライティングの技法や、資料収集法、ディスカッションによるアイデアの展開などは、大学における学習・研究にとって確かに不可欠なものである。またその一方で、初年次教育にはそのような学びのスタイルを習得すること以外の期待もこめられている。具体的にいえば、毎回出席し共同作業をするという授業のリズムを他の科目よりも強調することによって、学生間のつながりを深め、大学に定着するきっかけを作るということである。

しかし、後者への期待が強調されればされるほど、授業の内容ではなく、その場の作業をこなすことだけが注目され、肝心の授業内容は1年次修了と共に忘れてしまったという話も聞えてくる。両者のバランスをどのようにとるか。実際に学生の力になる初年次教育とは何か。本分科会では、初年次教育を、学生の定着のみならず2年次以降の学びにどのようにつなげることができるかについて、発表者による事例の紹介と分析をもとに検討していく。

## ○報告の概要：

## 1. 木越康氏

「意欲喚起系初年次教育「学びの発見」  
導入の経緯と問題点－大谷大学の場合－」

木越氏は、大谷大学で従来行われていた初年次教育（建学の理念、専門基礎系、語学など）に加えて、2005年から実施している「学びの発見」と呼ばれる大学への



導入の科目の事例を紹介した。

180分（90分×2コマ）の時間をとり、60～80人程の全体クラスにおいて教員が当日の作業内容やその意義をレクチャーし、その後作業クラス（1クラス20人前後×3～4クラス）に分かれ、作業クラスでの指導はTAが担当する。作業クラスはさらに6～8名程の班に分かれ、この班のなかで共同作業をしていく。ブ레인・ストーミングで自由な発想をし、KJ法を用いて拡散したアイデアにつながりを見出し、参考文献などを引用しながら、最終的にはレポートにまとめ、口頭発表するという一連の流れがあり、形としてはアカデミック・リテラシーやアカデミック・ライティングの技法を学ぶ授業であると捉えることができる。

しかし木越氏の強調する点は、そのような大学での学びの技法ではなく、むしろタイトルに表れているとおり、「意欲喚起」ということにあるといえよう。大谷大学での初年次教育はこの「学びの発見」ととどまらず、通年科目の「人間学」や「演習1」、学科別にそれぞれの専門分野における研究方法を学習する「専門の技法」など

がある。「学びの発見」では、様々な作業を通じて大学での学びの方法を身につけるが、それは大学生に求められる基礎学力のごく一部に過ぎない。そこで、初年次教育として開講されている他科目と連動することによって、その不足分を補うのである。その意味で、この「学びの発見」は「学生の意欲を喚起するのが主目的である」と明確に位置づけられることによって、十全な学習効果が期待できると考えられる。

## 2. 本田康二郎氏

### 「同志社大学商学部における 初年次教育の取り組み」

本田氏の報告において特徴的であったのは、同志社大学商学部の初年次教育が「アカデミック・リテラシー」と「ビジネス・トピックス」の2科目に凝縮されているということを紹介したことである。大谷大学の事例とは対照的に、非常に多くの学習要素がこの2科目に集中的に盛り込まれていることが、紹介された事例から見て取ることができた。

前期開講の「アカデミック・リテラシー」は、大きく分けると、知的生産の方法、自校理解の促進・学習意欲の涵養、大学での居場所作りという諸要素から成り立っている。また、資料検索、ノートの取り方、レポートの書き方などの基本的な学習スキルから、同志社大学の沿革や思想、そして学生間および学生と教員間の関係の交流促進などがこの科目の中で進められている。

後期開講の「ビジネス・トピックス」は、キーワードを決めてそれについて最終的に論文を執筆する。前期の「アカデミック・リテラシー」よりも一般的なゼミの形式に近づけた、2年次以降の学習のスタイルを意識した授業になっている。

また、初年次教育の2年生版といった性質をもつ科目である「スタディ・メソッド」によって、少人数クラスによるゼミ形式の学習を継続させている。

## 3. 杉谷祐美子氏

### 「学士課程教育における初年次教育の位置づけ」

杉谷氏は、日本私立大学協会附置私学高等教育研究所の「効果的導入教育カリキュラムの開発」（2001年）と、国立教育政策研究所の全国調査「大学における初年次教育に関する調査」（2007年）の調査結果を分析し、様々な初年次教育の領域があるなかで、各大学で十分に実施

されていると見なせるものと、ニーズはありながらも十分に実施されているとはいえないものとを明確に分けて提示している。後者の代表的なものが「ステューデント・スキル」系の領域であり、これは大学生として学習・生活していく際の基本的常識や自己管理方法に関する知識である。

2001年から2007年への調査結果の変化を見ると、各大学での取り組みが進み一回りした観のある初年次教育において、その内容が精選されるべき時期に来ており、学士課程教育全体の中での初年次教育を位置づける必要があると杉谷氏は分析している。

杉谷氏の報告のもう一つの柱は、学生同士がコメントし高めあう「基礎演習」についてのものである。これは最終的に卒業論文を執筆することを視野に入れた、問題発見・設定を中心としたアカデミック・ライティングの技法である。論文の検討方法を紙ベースのクラスとブログベースのクラスに分け、時間をおいた後での再検討が容易であるブログベースのクラスには有意な効果が見られたということであった。

## ○報告に対する質疑：

質問：初年次教育の評価方法や教育効果はどのようなものがあるか。

### 木越氏から：

大谷大学の「学びの発見」はTAなどが主に教室内での作業をリードし、教員は主にTAとSAのフォローをする。なかには学級崩壊のような状況になるクラスがあったり、また、出席さえしておけばいいのだという考えをもつ学生が出てくる場合もある。さらに、この授業は2時限連続（180分）の授業時間をあてているが、作業終了をもって解散することができるので、とにかく早く終わらせようとする学生が出てくる。そういう状態になりそうなときに、教員がそのクラスや班に付いて、軌道修正の役割をつとめる。

成績評価については、実践を重視する授業なので、作業やレポートの出来不出来で差をつけないことにしている。出席および定められたレポート提出回数によって成績をつける。

この授業の効果については、今回初めてアンケートによって受講した学生や担当教員からの声がまとまったので、これから検討をするつもりである。



**本田氏から：**

同志社の初年次教育は、各教員の裁量に任されている。アカデミック・リテラシーなど、やるべき大きな枠組みは決まっているので授業全体は似てくるが、その一方で評価基準は各教員にまかされている。学生のアンケート結果を見ると、「他の先生の方が楽だった」というような意見が見られることもある。

2年次への効果ということについては、はっきりした調査はされていないが、2年次担当教員に聞くと、「ばらばらだ」ということであった。この試みは始まったばかりなので、全体を底上げするような効果が出ているかどうかを含め、まだ分からないことが多いのが現状である。

**杉谷氏から：**

2年次以降の効果に関していえば、基礎演習やフレッシュャーズ・セミナーで担当した学生に会ったときに聞いてみると、「あのときは大変だったけれど、やってよかった」という感想が聞かれた。また、ゼミ生などに聞くと「他のレポートを書くときに役立った」という意見がある。

**質問：**180分の授業を導入した経緯を教えてください。学内の反対に遭わなかったか。

**木越氏から：**

180分にしたのは、やはり実践を中心とした授業にしたかったからである。ディスカッションやレポート作成が終業ベルで切れてしまうことを避けたかった。この科目を立ち上げるにあたって、様々な委員会などで先生方から意見を頂いた。それらの意見をまとめて一言で言えば、「それは大学ですることなのか」ということになる。また、「私たちはすでに（初年次教育を）やっている（ので必要ない）」という意見もあった。第一学年から指導教員制をとっているので、そこで十分にやれているのだという意見である。

これらの反対意見を説得して始めたのではなく、趣旨に賛同するメンバーでまず始めた。5年経過したいまではそれほど抵抗はないといえる。また副次的効果として、TAを担当する大学院生への教育効果も大きい。

**質問：**初年次教育の方向性についての（教職員を含めた）全学的な明確化の取り組みはされているか。

**本田氏から：**

同志社大学商学部に関しては、導入教育センターが初年次教育を主導し、カリキュラム設定から教育効果の検討までを行っている。しかし学部によって取り組みが違っているので、他の学部では商学部ほど徹底されていないところもあるかと思う。

**杉谷氏から：**

ブログ利用について。たしかに、最初にシステムを作りあげ、そしてそれを管理するのが大変である。しかしこの取り組みは学内の共同研究ではじまったので、最初に詳しい方に構築してもらい、それを例えばSEの経験のある院生が管理するということで運営している。周囲の協力を得ながらすすめている。

**○考 察**

本分科会を設定した際の根本的な問題意識は、初年次教育を2年次以降に有効につなげるにはどうしたらいいか、ということであった。初年次教育が「初年次だけ」のたんなるイベントであるべきではなく、他の科目と有機的に関係し学士課程教育全体の基礎を成すべきであるという主張に基づき、各報告者に事例紹介や分析を依頼した。

木越氏の発表から伺える観点は、「割り切り」ということである。本分科会はいくまで「2年度以降への継続性」ということを問題として考えてきたが、大谷大学においては2年次以降への初年次教育の継続を切り離して考え、あまり「欲張らない」初年次教育が展開されていた。ここでの科目「学びの発見」は、学生が大学での学びの方法に慣れるための授業と位置づけられている。もちろんその反面、スタディ・スキルからステューデント・スキル、アカデミック・ライティングの技法をこの授業で十分に身につけるまでは至らず、また大人数であるがゆえに教員の指導がなかなか届かないというのも事実である。

本田氏からは、学生同士のレポート完成への意欲を喚起することによってアカデミック・ライティングの指導をすすめていくことが紹介された。本田氏は初年次教育を中心に担当する教員であるが、それでも担当人数は20人クラスが6つということで非常に多く、学生のレポートにコメントをつけて返却する努力は大変なものがある。レポート添削というやり方は理想的な指導方法であることは間違いがないが、それに伴う教員の負担という

ことも併せて考える必要がある。

杉谷氏の発表では、「内容の継続性」ということに着目して、基礎演習における問題の立て方から実際の論文執筆までを全体的にサポートする仕組みが紹介された。そこでは、ブログを活用し、学生の自主的な作業を促す工夫が特徴的であった。しかしその一方で、杉谷氏自身

も指摘するように、この方法は、大学での目的意識が比較的明確で均一化された教育学系学部だからこそ可能であるものかもしれない。しかしいずれにせよ、アクティブ・ラーニングが一定の効果を持つことが示されたことは、初年次教育改善にとっての有効なヒントとなろう。



# 意欲喚起系初年次教育「学びの発見」 導入の経緯と問題点

大谷大学文学部 准教授・学生部長 木越 康

大谷大学では、2005 年度に大きなカリキュラム改革を行った。既存の授業の整理・統合や科目名称の大幅な変更、極めて自由度の高い科目選択システムから副専攻に倣う形での「セット科目」制度の導入など、多岐にわたる改革を行ったが、特記すべきものの一つとして、初年次教育に関する強化策の導入があげられる。

それまでも大谷大学では、初年次教育の一貫として「人間学Ⅰ」と各専門の「演習Ⅰ」を必修科目として置いてきた。「人間学Ⅰ」とは、仏教精神にもとづく本学のいわば基幹科目であり、ブッダならびに親鸞の思想を 1 年間にわたって学習する建学の理念をもっとも体現した科目である。また、専門の「演習Ⅰ」は各専攻分野の基礎演習科目であり、それぞれの専門分野の学問的課題の確認や 2 年次以降さらに細分化されるコース紹介などを行ってきた。これらを初年次に課すことによって、大谷大学への導入を図るとともに、2 年次以降の専門課程での学習に備える教育をおこなってきたのである。

しかし、周知の通り、学生の質の変化（大学間でその意味内容は異なるであろう）や社会の大学に対する要求の変化などを受けて、大学教育の全般的見直しが図られる中、本学においても初年次教育を強化する必要性が議論された。その結果、既存のものに加えて、高校から大学への転換教育を狙いとした科目「学びの発見」と、各専門分野へのスムーズな繋がりを狙いとした「専門の技法」の導入が決定され、実施された。

今回は限られた時間でもあるので、特に本学で「学びの発見」と呼んでいる科目について紹介することとしたい。「学びの発見」とは、全学科の第 1 学年に必修として課す、本学独自の初年次教育科目である。第 1 学年前期中に、1 週 2 コマ、180 分連続で行う実践形式の科目である。開講の狙いは「学びの発見」という科目名称が表す通り、大学における「学び」の、豊かさや楽しさ特殊なスキル等を、学生それぞれに発見してもらうことにある。

授業は、当日の作業について担当教員から全体レクチャーを受けた後、TA や SA の補助のもとで、演習教室や情報処理教室、研究室や図書館などを利用しながら大学における学習・研究のさまざまなスキルを体験していく形式をとっている。大学で主体的に学ぶためにはいろんな環境や技法、発想法があることを知り、それらを体験することにより、大学での学びに積極的に取り組めるようになることが期待されているのである。

全学科同時にスタートさせるため、実施に向けてはさまざまな準備と多くの工夫を必要

とした。授業内容の確定はもちろん、同内容を統一して実施するための手引書の作成や体制の構築、180 分連続開講の維持にかかわる時間割や教室確保の問題、また、少人数での実戦をサポートするスタッフ確保や養成、さらには同一基準によって行われる成績評価の問題など、2 年ほどの準備期間でクリアすべき課題は山積みであった。結果として、一つの新規科目を導入するために、担当教員はもちろん、TA/SA などのサポート学生、関係所管事務局など、大学全体を巻き込む形での実施形態をとることとなった。

今回の発表では、そのような導入の経緯や実施の様子、さらには導入後 5 年ほど経過したなかで確認される効果や問題点などを報告したい。

2009年度第15回FDフォーラム

2010. 3. 6～7

第1分科会「2年次以降につながる初年次教育」

## 意欲喚起系初年次教育 「学びの発見」導入の経緯と問題点

—大谷大学の場合—

大谷大学  
木越 康

### 本日の話題

- (1) はじめに
- (2) 大谷大学における初年次教育
- (3) 2005年からの新規科目「大学導入」の紹介
  - ・ねらい
  - ・開設に至るまでの経緯
  - ・内容
  - ・現状
- (4) 教員・学生アンケート調査から見てくること
- (5) おわりに —今後の課題—



### 【大谷大学における初年次教育】

◎理念系科目

「人間学Ⅰ」

建学の理念である〈仏教精神〉にもとづく「人間」に関する学。  
ブッダや親鸞の思想を通して「人間」を考える。

◎専門基礎系科目

「専門学演習Ⅰ」

真宗学・仏教学・哲学・社会学・歴史学など、各専門分野の基礎演習。

◎外国語科目

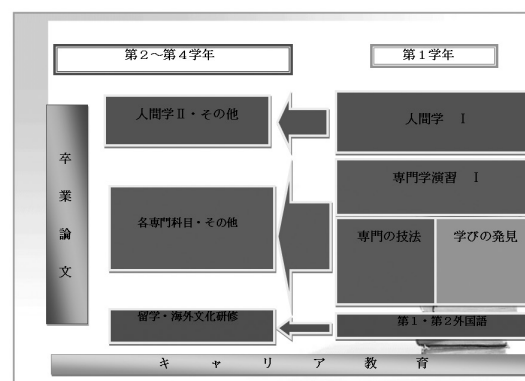
・第1第2外国語

☆〈2005年度より新規科目開講〉

◎導入系科目

「学びの発見」〈大学導入〉(前期)

「専門の技法」〈学科導入〉(後期)



### 【さまざまな導入期教育】

◎スタディースキル: ノートのとり方・レポートの書き方・参考資料の探し方・扱い方・コンピューターリテラシー

◎スチューデントスキル: 大学生としての一般常識や受講の態度

◎専門導入: 各専門分野の基礎的スキル・専門辞書の扱い方・レジュメの作り方

◎建学の理念・理念教育



### 新規導入系科目

☆「学びの発見」—大学導入—

- ・大学における「学び方」を学ぶ
- ・2コマ連続(180分)の実践系科目

☆「専門の技法」—学科導入—

- ・「学びの発見」の後期に開講(180分)
- ・各専門分野における学びの基本的スキルの習得
  - 専門辞書活用法
  - 論文(批評・作成)基礎
  - フィールドワーク体験
  - .....etc





<大学導入科目>  
**「学び」の発見**

**大学での「学び」の楽しさを発見しよう！**

○さまざまな実践作業を通して、大学での学びの（スキル）を体験し、学びの（仲間）や（場）や（アイテム）を「発見」していく。

○TA・SA補助のもと、教室・研究室・情報教室・図書館などを利用しながら学習を進める。「学ぶ」ための環境・技法・発想法を知り、それらを体験することにより、大学での「学び」に主体的に取り組める意欲の喚起を図る。



**学びの発見**  
**【5つのユニット】**

【1】ブレン・ストーミング；アイデアを広げよう

【2】KJ法；アイデアを整理しよう

【3】レポート作成；アイデアを表現しよう

【4】「参考文献」引用によるレポート強化；他者のアイデアに学ぼう

【5】プレゼンテーション；アイデアを伝えよう



**大教室レクチャー**  
〈学科別120～80人前後クラス×9〉

↓ ↓ ↓

教員スタッフ9名

↓ ↓ ↓

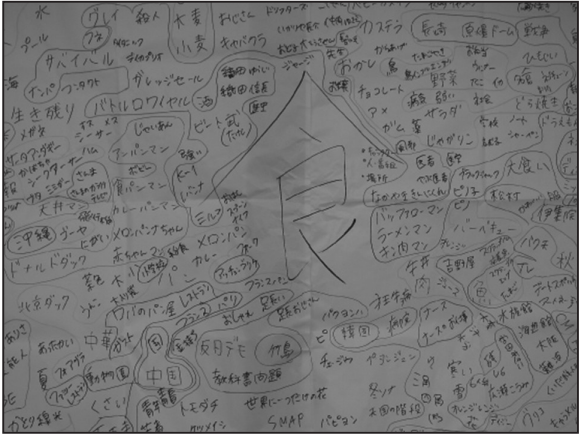
小教室による補足レクチャーと実践準備  
〈TA/SA指導のもと、25名程度の小クラス〉

↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓

TA/SA約40名

↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓

**班別実践**  
〈学生班長主導のもと、5～6人程度の班〉





KJ法の実践



KJ法の実践



大谷大学総合研究室



KJカード



—授業の狙いを見失わないために—

〈大学における「学び」の楽しさ発見〉

自由な発想を認める(他者を傷つけない限りにおいて…)

良いところを褒める(欠点は指摘のみし、細かな修正はしない…)

苦手なことは無理強いない(発言できないならそれでもよい…)

〈得手〉と〈不得手〉の発見

〈長所〉と〈修正点〉の確認



【課題】

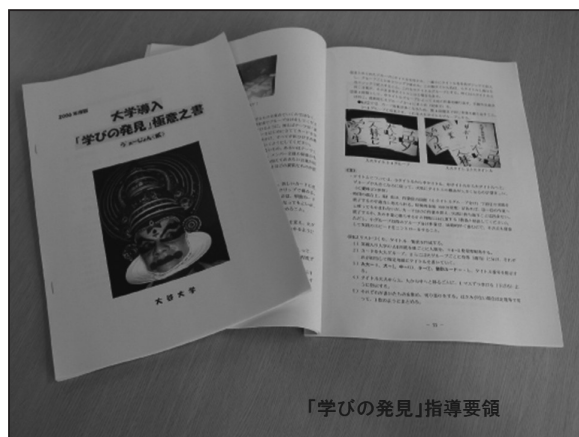
- \* 教員・TA・SAなどのスタッフを常に確保し続けること
- \* スタッフの教育
- \* 授業の質の確保のために…
  - ・大学全体の協力体制
  - ・ハード面の整備(TA-ROOM)
  - ・事前事後ミーティングによる連携の確保
  - ・後期開講「学びの発見」



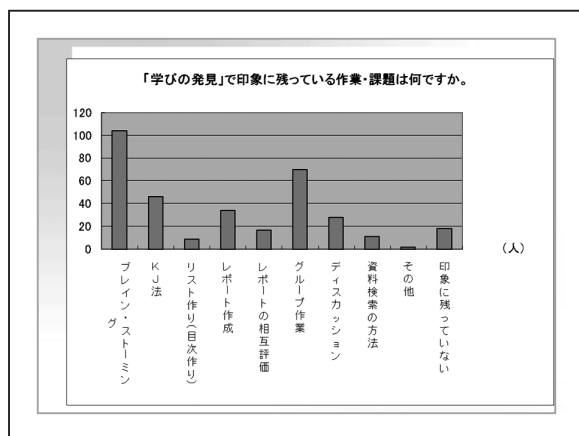
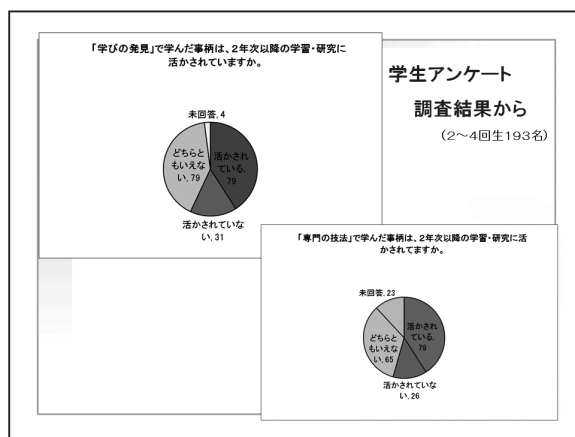
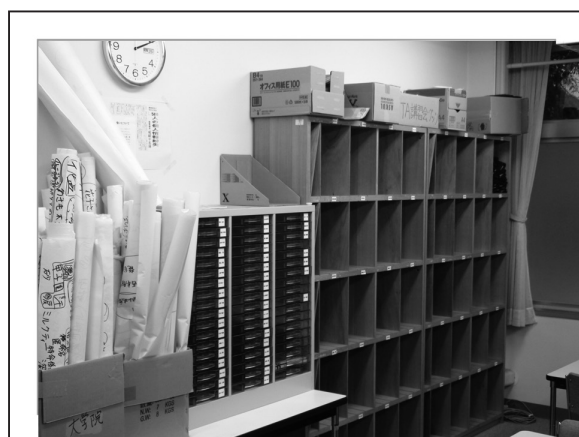
「学びの発見」担当表

| 学科<br>(入学定員)        | 大学導入<br>「学びの発見」      |      |          |    |      | 学科導入<br>「専門の技法」       |
|---------------------|----------------------|------|----------|----|------|-----------------------|
|                     | 前期                   |      |          |    |      |                       |
|                     | 担当教員                 | 教室   | TA       | 人数 | 小教室  | 後期                    |
| 真宗学科<br>87名<br>(70) | 木<br>4<br>5<br>大谷 太郎 | 1200 | ◎ 日本 太郎  | 22 | 演習室1 | 木<br>4<br>5<br>真宗学教員A |
|                     |                      |      | ◎ 関西 花子  | 22 | 演習室2 |                       |
|                     |                      |      | ◎ 日本 次郎  | 22 | 演習室3 |                       |
|                     |                      |      | ◎ 関西 太郎  | 21 | 演習室4 |                       |
| 仏教学科<br>70名<br>(60) | 火<br>3<br>4<br>京都 花子 | 1200 | ◎ 大塚 太郎  | 24 | 演習室2 | 火<br>3<br>4<br>仏教学教員A |
|                     |                      |      | ◎ 近畿 幸子  | 28 | 演習室3 |                       |
|                     |                      |      | ◎ 東京 花子  | 28 | 演習室4 |                       |
|                     |                      |      |          |    |      |                       |
| 哲学科<br>65名<br>(60)  | 火<br>3<br>4<br>大谷 花子 | J108 | ◎ 西日本 次郎 | 22 | H501 | 火<br>3<br>4<br>哲学教員A  |
|                     |                      |      | ◎ 日本 三郎  | 22 | H502 |                       |
|                     |                      |      | ◎ 大谷 良平  | 21 | H503 |                       |





「学びの発見」指導要領



「活かされている」一学生(79名)の意見から一

- ・話し合いの場で物怖じせず積極的に意見を言えている。(哲2)
- ・ブレイン・ストーミングの考え方は現在も活用している。(哲2)
- ・視野が広がった。(真2)
- ・グループで作業により、友人作りなど、人のつながりが増えた。(社3)
- ・文章を書くとき、自分の言いたいことの整理するヒントになった。(国際3)
- ・授業の中でグループ作業があるときなどにスムーズに進めることができた(国際3)。
- ・レポート製作や、教職のグループディスカッションでよく利用した。(史4)
- ・今のグループ発表の授業でレポートを作成するための手順などがみんな分かっているので進めやすい(哲4)

# 「活かされていない」—学生(31名)の意見から—

- ・活用の仕方がよくわからなかったから。(哲4)
- ・意味がないです。(人情4)
- ・覚えていない。(社4)
- ・普段から意識できていないから。(社3)
- ・使う機会がない。(哲2)
- ・まだ使う場がない。(真2)
- ・活かされていないから。(真2)



# 自由記入欄から

- ・あまり人と関わるのが得意じゃなかったからいい勉強になった。(哲2)
- ・班行動が嫌でした。(哲2)
- ・先生との交流によって、考え方や、とらえ方などができるのですごかったと思う。(哲2)
- ・アシスタントの方に良くしてもらって、作業が進んだ。(人情4)
- ・最初は何の意味があつてこんなことをやっているんだろうと思っけが、卒論を書く上で非常に大切なことだと分かった。(国際2)
- ・卒論を書くときに役立つと言われたが、いざ卒論を書く段階になると忘れていました。(文4)
- ・今までで一番楽しい授業であつた。友達がそこでできた。(人情4)
- ・高校からの授業の印象と違い、新しい形の授業だったので、高校・大学への切り替えが出来て良いと思う。(史4)



## 総合研究室への入室状況

| 学年次  | 2003   | 2004   | 2005   | 2006   | 2007  |
|------|--------|--------|--------|--------|-------|
| 第1年次 | 4,005  | 4,309  | 5,695  | 5,494  | 5,254 |
| 第2年次 | 7,715  | 7,723  | 10,379 | 8,853  | 7,562 |
| 第3年次 | 13,969 | 13,195 | 10,683 | 13,680 |       |
| 第4年次 | 16,174 | 16,475 | 14,272 |        |       |

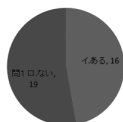


## 貸し出し図書冊数

| 学年次  | 2003   | 2004  | 2005  | 2006  | 2007  |
|------|--------|-------|-------|-------|-------|
| 第1年次 | 1,428  | 1,447 | 3,361 | 4,509 | 6,755 |
| 第2年次 | 2,667  | 2,775 | 4,315 | 4,611 | 5,184 |
| 第3年次 | 5,356  | 4,942 | 5,892 | 6,742 |       |
| 第4年次 | 10,111 | 8,148 | 9,514 |       |       |

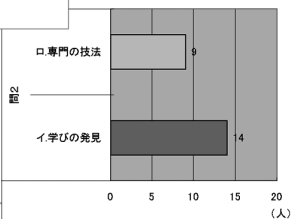


## あなたは、初年次教育を担当したことがありますか。(人)



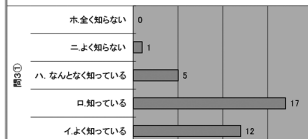
## 教員アンケート調査結果から

いずれの科目を担当されましたか。

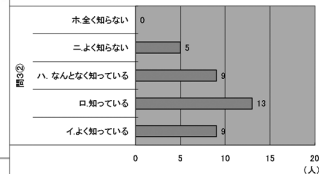


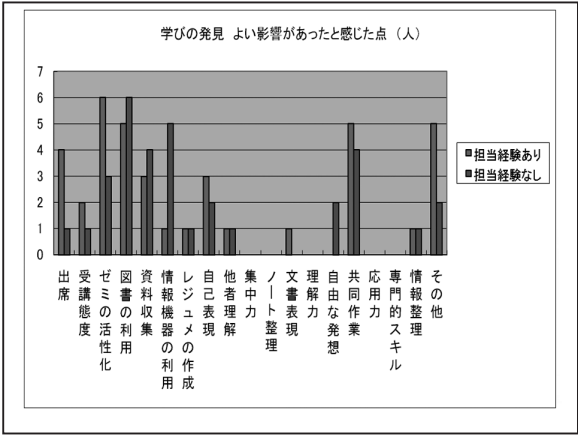
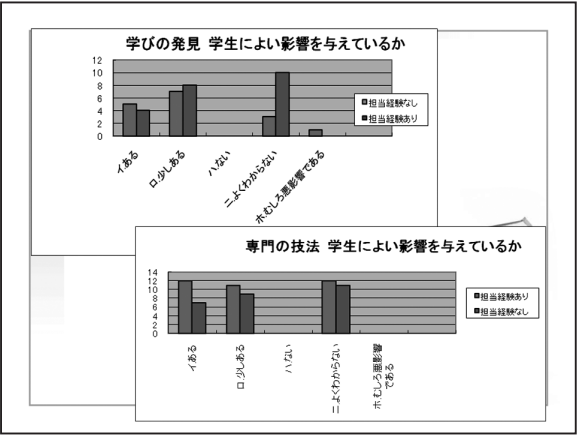
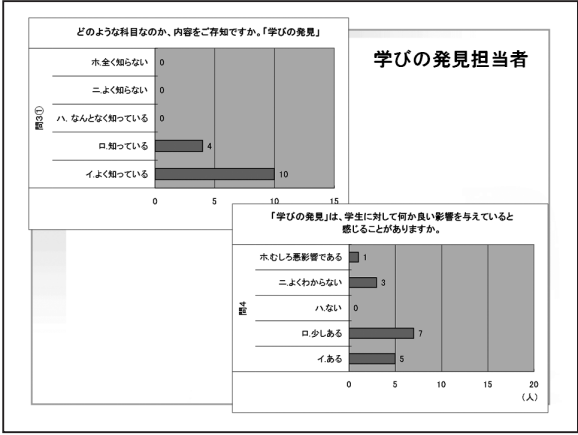
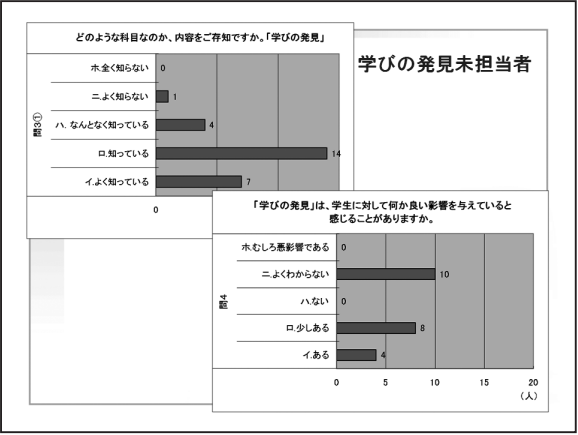
◎導入以前と導入以後の学生の教室での学びの姿勢について、なにか変化を感じることがありましたら、どんなわずかな事でもお聞かせください。

## どのような科目なのか、内容をご存知ですか。「学びの発見」



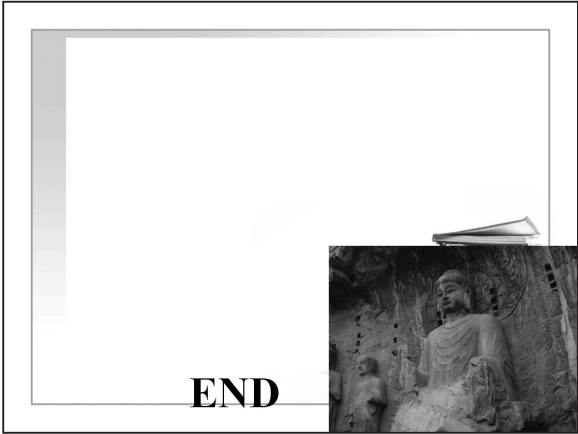
## どのような科目なのか、内容をご存知ですか。「専門の技法」





自由記入欄から

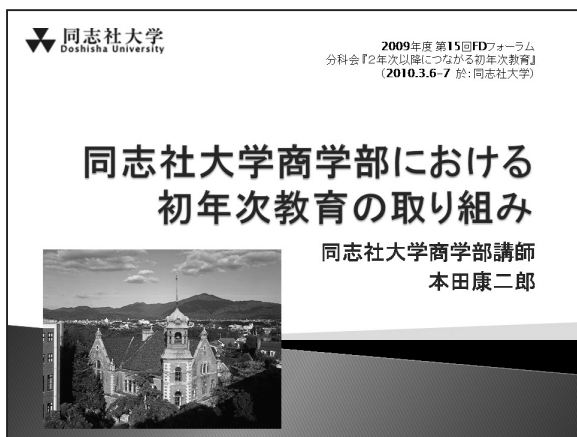
- ・正直、学びの発見の学習効果については疑問。BSやKJ法の成果を測定できない。
- ・目標の明確化。
- ・重視するのであれば、担当者の負担をもっと軽減すべき。
- ・初年次教育は、今の条件の中では、現状がせいじっぱい。むしろ限られた中でいろいろ盛り込んでいるので、ある部分は他の科目に機能を手渡すべき。1年次の他授業や2年以降の授業との有機的連関をどうはかるか。
- ・学びの発見、専門の技法と1年生ゼミとの関係を考えるのが、学科の中でも共有できていない。
- ・共同作業を通して学び(関係の構築)という面で有益であると思われるが、さらに自己の学習への応用力という連続性が意識されるとよい。





# 同志社大学商学部における初年次教育の取り組み

同志社大学商学部 講師 本田康二郎



## 発表の流れ

1. 同志社大学商学部概要
2. 同志社大学商学部の初年次教育
3. 初年次教育導入の背景
4. 初年次教育導入の必要性
5. アカデミック・リテラシー
6. ビジネス・トピックス
7. 成績評価について
8. 2年次につなぐために

## 1. 同志社大学商学部概要

- ▶ 同志社大学商学部商学科（一学部一学科体制）
- ▶ 在学生数 総計3,654名
- ▶ 男性 63.4% 女性36.6%
- ▶ 一学年学生数 855名（2008年度入学生）
- ▶ 現役入学生 約75% 第一志望入学生 約70%
- ▶ 入試区分：
  - ①一般選抜入試、②大学センター試験入試、
  - ③指定校推薦入試、④系列学内高校推薦入試、
  - ⑤AO入試、⑥スポーツ推薦入試、⑦外国人留学生

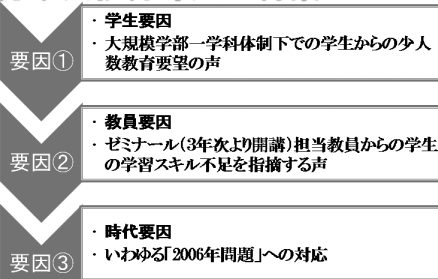
同志社大学商学部導入教育センター編『学生と大学の「幸せな出会い」を求めて―初年次教育とキャンパスライフアンケート―』p. 9より

## 2. 同志社大学商学部の初年次教育

- ▶ アカデミック・リテラシー(AL) ...初年次春学期開講
  - 大学での知的生産方法(後述)の習得をめざす。
  - 大学の歴史を学ぶことで、大学への帰属意識を高めることをめざす。
- ▶ ビジネス・トピックス(BT) ...初年次秋学期開講
  - ビデオ教材学習、企業見学、工場見学等を活用し、通常の座学では体験できないような最新のビジネス事情に触れさせることをめざす。
  - 学生の学習意欲を高め、学生間の相互交流を深めることをめざす。
- ◆ 両科目とも選択必修科目。(2007年度より、ALに関しては全学生が希望した場合でも履修可能な体制を整えている。)

同志社大学  
Doshisha University

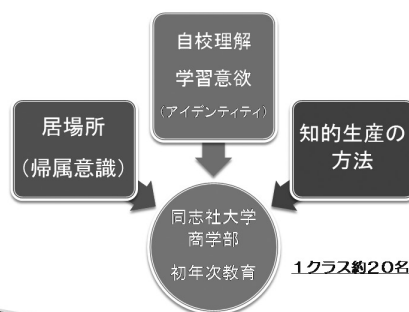
## 3. 初年次教育導入の背景



▶ 初年次教育導入へ

同志社大学  
Doshisha University

## 4. 初年次教育導入の必要性



同志社大学  
Doshisha University



## 5. アカデミック・リテラシー(春学期開講)

| 回  | 月日    | 講義内容             | 備考                 | 提出物     |
|----|-------|------------------|--------------------|---------|
| 1  | 4月10日 | オリエンテーション        | 講義内容、成績評価等の説明      | 自己紹介カード |
| 2  | 4月17日 | キャンパス・ツアー        | 学内見学               |         |
| 3  | 4月24日 | 同志社の歴史           | 映像資料鑑賞、講義          |         |
| 4  | 5月8日  | AI①: 図書館の利用法     | 図書館にて図書館司書からの講義    | 検索実習課題  |
| 5  | 5月15日 | AI②: 文献・資料の検索    | 教室にて授業の実習          | 情報検索実習  |
| 6  | 5月22日 | AI③: ノートの取り方     | 講義、実習              |         |
| 7  | 5月29日 | AI④: 読書と要約       | 講義、実習              | 中間レポート  |
| 8  | 6月5日  | AI⑤: レポートの書き方    | 講義、実習              |         |
| 9  | 6月12日 | AI⑥: パワーポイントの使い方 | 講義、資料作成(テーマ: 社会等々) | PPT資料   |
| 10 | 6月19日 | グループ・ディスカッション    | 討議                 |         |
| 11 | 6月26日 | プレゼンテーション1       | 成果発表               | 発表評価シート |
| 12 | 7月3日  | プレゼンテーション2       | 成果発表               | 発表評価シート |
| 13 | 7月10日 | ゲストスピーカー講演会      | リタラス会等             |         |
| 14 | 7月24日 | まとめ              | 成果発表配布、提出物の返却      | 学期末レポート |

## 5. アカデミック・リテラシー

▶ 「知的生産方法」の習得

□ 調べる、読む、書く、議論する、発表する

- ✓ 「調べる」... 図書館の使用法、各種インターネット情報の活用術
- ✓ 「読む」... 学術論文の要約練習
- ✓ 「書く」... ノートの取り方、学術論文の書き方、参考文献出典表記法
- ✓ 「議論する」... テーマの議論、プレゼンテーション準備
- ✓ 「発表する」... パワーポイント資料作成、プレゼンテーション



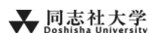
## 5. アカデミック・リテラシー

- ▶ 「自校理解」の促進
- ▶ キャンパス・ツアー
- ▶ 同志社大学の歴史(ビデオ教材)
- ▶ 新島襄の生涯(ビデオ教材)
- ▶ 同志社の思想(「同志社大学設立の旨意」)

▶ 「学習意欲」の涵養

▶ グループディスカッションの例

テーマ 「同志社の特徴とその活用」、「商学部とは何か」、「社会問題の解説」のうちから一つを取り上げる。



## 5. アカデミック・リテラシー

▶ 「居場所」作り

- ▶ 学生間交流の促進... 自己紹介、名前あてゲームなど
- ▶ 学生教員間の交流の促進... 日頃の声掛け、挨拶、メールを通じた連絡
- ▶ グループ学習... ディスカッションを通じた仲間意識の醸成



## 5. アカデミック・リテラシー

▶ 入学前事前学習プログラム(2006~)の活用

1. 世界同時不況
2. 非正規雇用
3. 事故流通の背景
4. WTO交渉決裂
5. クルマ経済
6. 政府系ファンド
7. 会計基準国際化

2009年度の学生らは上記の中から一つテーマを選び、入学前に小論文を提出した。AIにおける学術論文作成の練習は、この小論文を手直ししながら進めていく。



## 6. ビジネス・トピックス(秋学期開講)

| 回  | 月日     | 講義内容        | 備考            | 提出物     |
|----|--------|-------------|---------------|---------|
| 1  | 9月25日  | オリエンテーション   | 講義内容、成績評価等    |         |
| 2  | 10月2日  | ワーキングプア①    | 映像資料、講義       |         |
| 3  | 10月9日  | ワーキングプア②    | 講義、資料収束       |         |
| 4  | 10月16日 | 課題1         | 小レポート内容の取次発表  | 小レポート①  |
| 5  | 10月23日 | 地域活性化とビジネス① | 映像資料、講義       |         |
| 6  | 10月30日 | 地域活性化とビジネス② | 講義、資料収束       |         |
| 7  | 11月6日  | 課題2         | 小レポート内容の取次発表  | 小レポート②  |
| 8  | 11月13日 | 企業の社会的責任①   | 映像資料、講義       |         |
| 9  | 11月20日 | 課題3         | 小レポート内容の取次発表  |         |
| 10 | 12月4日  | 企業の社会的責任②   | 講義、資料収束       | 小レポート③  |
| 11 | 12月18日 | プレゼンテーション   | パワーポイント資料作成   |         |
| 12 | 1月10日  | 企業経営学会      | (サントラール・鳴尾留所) |         |
| 13 | 1月10日  | 企業経営学会      | (サントラール・鳴尾留所) |         |
| 14 | 1月15日  | まとめ         | 成果発表配布、提出物の返却 | 学期末レポート |

## 6. ビジネス・トピックス

▶ 「新自由主義」をキーワードに、現代社会で実際に起きている社会問題について考察を深めることをめざす。

▶ 扱うテーマは以下の三つ

- ① ワーキングプア
- ② 地球温暖化とビジネス
- ③ 企業の社会的責任(CSR)

▶ 学びを通して、学問の営みが誠実なコミュニケーションに依存していることを理解させる。



## 6. ビジネス・トピックス

▶ ゼミナール参加の準備

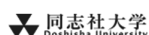
- ▶ 「学習意欲」の涵養
- ▶ ビデオ教材を用いて具体的な内容の学習
- ▶ 「知的生産方法」の習得
- ▶ 講義時間の中で情報検索実習をする。
- ▶ テーマごとの小レポートの作成(雑誌記事の要約)
- ▶ グループ内での小レポート発表(読み合わせ)
- ▶ 情報収集の役割分担と知識交換の練習



## 6. ビジネス・トピックス

▶ コミュニケーション促進のインセンティブとしての「期末レポート作成」

- ① 日本や世界各地のワーキングプアの現状をまとめ、この問題への解決案について論ぜよ。
- ② 地球温暖化問題への各国の対応を要約し、京都議定書の定める問題解決への戦略を評価せよ。
- ③ 複数の企業について、CSRの取り組みを比較検討せよ。その上で、企業の社会的責任とは何か、自分の意見を述べよ。



## 6. ビジネス・トピックス

▶ コミュニケーション促進のインセンティブとしての「期末レポート作成」

- ▶ 「レポート作成にあたって、自分以外の班員が調べてきた情報(小レポート)を活用してもよい」とする。
- 「出典明記」の重要性を理解させる。
- 全員が責任をもって小レポートを書いてきた班ほど、情報が多く集まる。
- コミュニケーションが活発な班ほど、議論が深まり、レポートの作成もスムーズになる。



## 6. ビジネス・トピックス

▶ 「居場所」作り

- ▶ 学生間交流の促進…自己紹介、名前あてゲームなど
- ▶ 学生教員間の交流の促進…日頃の声掛け、挨拶、メールを通じた連絡
- ▶ グループ学習…ディスカッションを通じた仲間意識の醸成



## 7. 成績評価について

- ▶ 出席の重視
- ▶ 初年次教育は参加し体験することを怠れば、受講する意味がほとんどなくなってしまう。従って、一種の実習科目ととらえ、成績評価に出席点を反映させる。
- ▶ 具体的には、4回以上の欠席は履修名簿から除籍。
- ▶ 出席点と提出物、さらに学期末のレポートによって総合的に成績評価する。



## 8. 2年次へつなぐために

- ▶ 2年次開講科目  
『スタディ・メソッド』
- ▶ ゼミ形式・小人数クラス(5～10名程度)
- ▶ 「新書レベルの学術文献」を読みこなすことをめざす。
- ▶ 毎回、担当学生がレジュメを準備し読み進んでいく。
- ▶ 教員は学生たちの発表を補助、補足する。

3年次のゼミ活動へ



## 8. 2年次につなぐために（まとめ）

- ▶ 初年次教育で学んだ内容を、すぐに何かに活かす機会を用意する必要がある。
  - ✓ 期末レポートを提出させることで、学んだ内容を実践させる。
  - ✓ 他科目のレポート課題でも、学んだ内容を活かすように指示する。(他科目でも、レポートの採点基準に「書式」の項目を入れてもらえればなおよい。)
  - ✓ 学問の発展が、誠実なコミュニケーションに依存していることを実感させる。



## ご清聴ありがとうございました。

- ▶ 参考資料
  - 同志社大学商学部導入教育センター編
  - 『学生と教員の「幸せな出会い」をめざす導入教育』
  - 『特色GPシンポジウム報告集』
  - 同志社大学編 『同志社大学 大学案内2009』
  - 日経BPムック編 『同志社大学』
  - 酒名篤・川嶋太津夫編 『初年次教育 歴史・理論・実践と世界の動向』 丸善 2006
  - 大川一毅 「大学における自校教育の現状とその意義—全国国立大学実施状況調査をふまえて—」、『秋田大学教養教育研究年報11-21』 2006



## ご清聴ありがとうございました。

- ▶ 連絡先
  - 同志社大学 商学部 導入教育センター
  - 電話 075-251-3660
  - メール [ji-shojm@mail.doshisha.ac.jp](mailto:ji-shojm@mail.doshisha.ac.jp)
  - 本田康二郎 [khonda@mail.doshisha.ac.jp](mailto:khonda@mail.doshisha.ac.jp)



# 学士課程教育における初年次教育の位置づけ

青山学院大学教育人間科学部 准教授 杉谷祐美子

## 1. 本報告の目的

文部科学省の公式調査によると、2006年度の時点で初年次教育を実施する大学は約71%に上り、その後も拡大する兆しがみえることは学会の創立やこうした各種のフォーラム・シンポジウムの開催からもうかがえる。日本の初年次教育は啓蒙・導入期を経て、いまや、各大学において多様な実践活動が蓄積されつつある「第2ステージ」を迎えたといえる。しかし、初年次教育が拡大普及したとはいえ、こうした状況はさらに具体性を帯びた新たな課題をも生み出している。

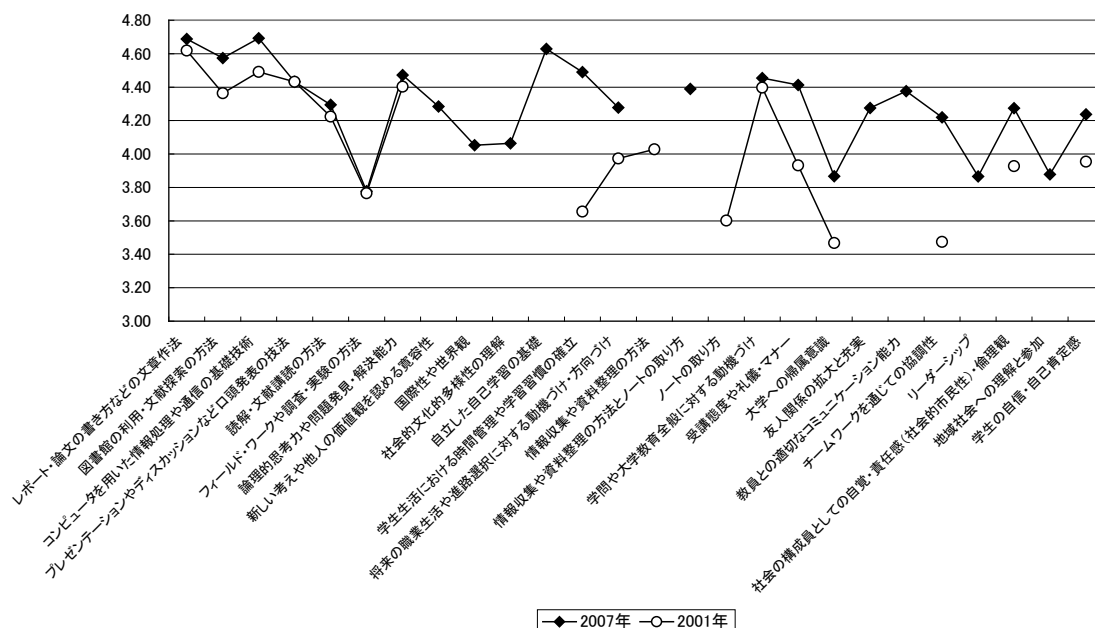
本報告では、筆者がこれまで実施してきた調査結果に基づき、初年次教育に対するニーズ、現場における課題、効果的取り組み等を整理するとともに、自らの授業実践を振り返りながら、学士課程教育における初年次教育の位置づけを検討することの重要性について述べる。

## 2. 初年次教育のニーズと課題

2007年に報告者が共同研究者として関わった国立教育政策研究所の全国調査（学部長対象）によれば、初年次教育を8領域に分類したうち、スタディ・スキル系（レポートの書き方等）は90.1%、スチューデント・スキル系（学生に必要な一般常識や態度）は63.0%、オリエンテーションやガイダンス（フレッシュマンセミナー、履修案内等）は99.1%、専門教育への導入（専門への橋渡しとなる基礎的知識・技能の教育）は84.6%、教養ゼミや総合演習などの学び全般への導入は68.8%の学部で実施しているとの結果になった。また、それぞれ正課の授業科目としての設置状況をみると、スタディ・スキル系が78.6%、スチューデント・スキル系が39.0%、オリエンテーションやガイダンスが15.8%、専門教育への導入が97.1%、学び全般への導入が96.3%となった。これらの数値から、オリエンテーションやガイダンスは最も実施率が高いものの、「フレッシュマンセミナー」などの授業科目として位置づけられているケースはまだ少なく、正課としては主に、スタディ・スキル系、専門教育への導入、学び全般への導入の授業科目が設置されていることが明らかである。また、これらの領域に比べて、スチューデント・スキル系の内容は実施率も正課教育への導入率も相対的に低いことがわかる。

しかし、初年次教育を通じて、学生が修得することが期待される内容について、「重要ではない」から「重要である」まで5段階尺度で重視する程度を尋ねてみたところ、スチューデント・スキルに対するニーズは決して低くないことが明らかになった。2001年に私学高等教育研究所において、全国の私立大学学部長を対象に同様の設問を用いて実施した調査結果と比較すると、2001年調査から2007年調査にかけて、全体的に各種項目の重視度の平均値が上昇している（図1参照）。それだけでなく、そもそもスタディ・スキルなどと比べて平均値が低いとはいえ、時間管理、受講態度、大学への帰属意識、協調性、社会の構成員としての自覚、自己肯定感など、スチューデント・スキルに関わる項目が顕著に伸びている。

図1 初年次教育で重視する内容(5段階尺度による平均値)



また、2007 年調査の自由記述では、担当教員間の熱意や指導力のばらつき、教員間の連携の不足、目的や内容等に関する合意形成の困難といった、2001 年調査から挙がっていた問題点も依然としてみられたものの、新たに初年次教育プログラムの内容・方法の検討と精選に結びつく課題も指摘されている。具体的には、第 1 にスチューデント・スキルに関する指導方法の導入、第 2 に多様なコンテンツを整理統合した総合的なプログラムの開発、第 3 に通年にわたるフォローや次年度以降の教育との接続といった課題が浮上している。

### 3. 初年次教育の到達目標と効果的取り組み

上記 3 つの教育プログラムをめぐる課題は、いずれも相互に密接に関連しており、学士課程教育全体の構造化とも深く関わっている。なぜならば、正課外の教育で対応を図られる傾向にあるスチューデント・スキルをどのように正課教育のプログラムに組み込むかという課題や、入学年度当初にとどまらぬプログラムの構築や次年度以降との接続といった課題は、より有効な教育内容・方法を精選して総合的な初年次教育プログラムを開発するうえで重要な視点にほかならないからである。また、高校から大学への移行過程や 1 年次後期および 2 年次とのつながりといった接点のみに着目するのではなく、学士課程教育全体が構造化されたなかで初年次教育の位置づけと役割を明確に設計し、その到達目標に応じたプログラムを構築してこそ、教育的効果も十分に発揮できるのではないだろうか。

もちろん、ここですぐさま学士課程教育の在り方や到達目標を明示できるわけではないし、それは報告者の力量を超えて余りある。それに「学士課程教育」と一口に言っても、ある程度の共通性を備えることは必要かと思われるが、本来、大学の特色や学部学科の特性によって多様な目標を設定することができよう。本報告においては、あくまでも学士課程教育の全体構造のなかで改めて初年次教育の位置づけを見直してみることの重要性を指摘するにとどめたい。



とはいえ、学士課程教育の到達目標をいったん度外視するにしても、初年次教育の到達目標自体はどのように考えたらよいだろうか。2008年に初年次教育学会で行ったワークショップでは、初年次教育の主要な到達目標として、「高校と大学の違いを理解できること」が多く挙げられた。その意味するところは、高校までの「生徒」としての学びと大学からの「学生」としての学びの違いを理解できることであり、さらにいえば大学生にふさわしい主体的な（能動的な）学習態度を身につけることだといえる。初年次教育とは高校から大学への円滑な移行を図るための教育だが、それは単純に大学生活に慣れるというだけでなく、高校までの学習態度から転換させることも含まれるはずである。このことは、近年、スチューデント・スキルに対するニーズが高まっていることとも符号する。

この主体的な学習態度の形成にとって有効な初年次教育の取り組みを検討する際に、報告者が企画・分析にあたった2008年のベネッセ大学生調査のデータを用いたい。大学における学習への取り組み26項目について因子分析をした結果（主因子法、Promax回転）、「Ⅰ ディスカッション等への貢献」、「Ⅱ 受講の基本的マナーの遵守」、「Ⅲ 興味に基づいた自主学习」、「Ⅳ 計画的・継続的自主学习」、「Ⅴ 授業の予習・復習」の5つの因子が析出された。総じて、高校での学習態度が主体的・積極的な学生は、大学での学習態度も積極的な傾向を示しており、そうした影響を除去するために、初年次学生を二分して、学習態度が相対的に身につけていない層（「低群」と呼ぶ）の下位尺度得点の平均を示したのが表1である。表中では、初年次教育に関わりそうな大学での授業経験8項目を列举し、授業経験の程度と学習への取り組み状況との関係を検討している。平均値の差から明らかなように、演習やアクティブ・ラーニング、コミュニケーションを図る授業経験が多い学生ほど、学習態度Ⅰ、Ⅲ、Ⅳを中心に平均値が高くなっている。勉強方法の授業経験もやや影響がみられるものの、講義にとどまらず、こうした演習を伴う授業形式であるほうが望ましいといえそうである。また、補習授業の経験はこれらの態度の値に影響はなく、学習態度Ⅴに関してはどのような授業経験とも負の相関にある。

表1 大学での授業経験と大学での学習への取り組み（初年次低群の学生）

平均値(SD)

|                 | Ⅰ ディスカッション等への貢献 |                |             | Ⅱ 受講の基本的マナーの遵守  |                 |             | Ⅲ 興味に基づいた自主学习  |                |             | Ⅳ 計画的・継続的自主学习  |                |             | Ⅴ 授業の予習・復習     |                |               |
|-----------------|-----------------|----------------|-------------|-----------------|-----------------|-------------|----------------|----------------|-------------|----------------|----------------|-------------|----------------|----------------|---------------|
|                 | 多い              | 少ない            | t値          | 多い              | 少ない             | t値          | 多い             | 少ない            | t値          | 多い             | 少ない            | t値          | 多い             | 少ない            | t値            |
| 補習授業            | 10.16<br>(3.42) | 9.79<br>(3.42) | 1.21        | 27.48<br>(4.52) | 26.58<br>(5.33) | 1.97<br>*   | 7.48<br>(2.02) | 7.50<br>(2.29) | -0.08       | 8.21<br>(2.46) | 7.92<br>(2.52) | 1.26        | 4.24<br>(0.81) | 5.31<br>(0.81) | -14.62<br>*** |
| 勉強方法の授業         | 10.30<br>(3.44) | 9.73<br>(3.40) | 1.79        | 27.38<br>(4.48) | 26.67<br>(5.32) | 1.53        | 7.82<br>(2.25) | 7.34<br>(2.16) | 2.36<br>*   | 8.44<br>(2.62) | 7.83<br>(2.42) | 2.68<br>**  | 4.49<br>(0.98) | 5.15<br>(0.87) | -7.62<br>***  |
| 少人数ゼミ・演習        | 10.55<br>(3.37) | 9.31<br>(3.37) | 4.27<br>*** | 27.18<br>(4.58) | 26.62<br>(5.50) | 1.28        | 7.61<br>(2.17) | 7.38<br>(2.23) | 1.18        | 8.33<br>(2.50) | 7.73<br>(2.47) | 2.82<br>**  | 4.68<br>(0.98) | 5.19<br>(0.86) | -6.37<br>***  |
| グループワーク等の導入     | 11.03<br>(3.42) | 9.05<br>(3.17) | 6.95<br>*** | 27.53<br>(4.60) | 26.40<br>(5.37) | 2.57<br>*   | 7.70<br>(2.19) | 7.32<br>(2.19) | 2.00<br>*   | 8.24<br>(2.53) | 7.85<br>(2.46) | 1.84        | 4.39<br>(0.91) | 5.36<br>(0.76) | -13.26<br>*** |
| ディスカッションの導入     | 11.41<br>(3.31) | 9.07<br>(3.20) | 8.07<br>*** | 27.43<br>(4.80) | 26.59<br>(5.21) | 1.85        | 7.89<br>(2.30) | 7.26<br>(2.11) | 3.21<br>**  | 8.50<br>(2.48) | 7.75<br>(2.47) | 3.36<br>**  | 3.99<br>(0.67) | 5.47<br>(0.62) | -25.36<br>*** |
| プレゼンテーションの導入    | 11.19<br>(3.26) | 9.11<br>(3.28) | 7.17<br>*** | 27.53<br>(4.62) | 26.50<br>(5.31) | 2.30<br>*   | 7.81<br>(2.20) | 7.29<br>(2.17) | 2.68<br>**  | 8.44<br>(2.44) | 7.76<br>(2.50) | 3.08<br>**  | 4.42<br>(0.93) | 5.27<br>(0.82) | -10.85<br>*** |
| 教員と学生のコミュニケーション | 11.09<br>(3.40) | 9.28<br>(3.27) | 6.04<br>*** | 27.43<br>(4.50) | 26.61<br>(5.34) | 1.79        | 8.08<br>(2.15) | 7.17<br>(2.16) | 4.65<br>*** | 8.61<br>(2.48) | 7.70<br>(2.45) | 4.10<br>*** | 4.01<br>(0.70) | 5.44<br>(0.65) | -23.35<br>*** |
| 学生の意見・授業評価の反映   | 11.00<br>(3.25) | 9.35<br>(3.38) | 5.43<br>*** | 27.93<br>(3.98) | 26.36<br>(5.49) | 3.80<br>*** | 8.05<br>(1.94) | 7.20<br>(2.27) | 4.52<br>*** | 8.71<br>(2.39) | 7.67<br>(2.48) | 4.67<br>*** | 4.48<br>(0.98) | 5.17<br>(0.85) | -8.17<br>***  |

注「多い」とは「よくあった」+「ある程度あった」の合計、「少ない」とは「あまりなかった」+「ほとんどなかった」の合計。\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

#### 4. 学びあいによる授業実践

前述の調査からは、学生同士の学びあいやコミュニケーションが学生の学習態度の形成に一定の効果があることがうかがえた。それでは、実際にどのようなかたちで授業に取り入れたらよいだろうか。報告者はこれまで、自分の担当する教育学科の基礎演習の授業実践を対象として研究に取り組んできた。最後に、そこから得た知見をまとめたい。

当該授業は、教育学科の学生が1年次前期に履修する必修科目である。この授業では、前期から夏休みにかけて、学生各自が自分の興味関心のある教育問題について文献研究を進め、最終的に4000字程度の論文を作成することを課題としている。授業の目標は、論文作成のなかで自ら「問い」「考え」、学びあいから「気づく」ことを通じて、大学での学びの姿勢を少しでも身につけることにある。具体的には、自分の経験や思い込みから問題を論ずるのではなく、教育事象を事実に基づいて考察し、自分のもののとらえ方を相対化できるような態度を養うことにある。学士課程教育との関連からいえば、ゼミ論や卒業論文を視野に入れつつ、論文の基本的な書き方と大学での学びの姿勢の習得を目指す授業と位置付けられよう。そのため、学生自らが問題を発見し、問題を設定するプロセスに注目し、とくに授業内外における協調的学習環境が与える影響について研究している。授業内では学生各自の論文内容を批評検討するためにグループ・ディスカッションを多用し、さらに授業外では学習支援環境として課題提出や論文へのコメント用にブログを利用している。

本研究から得た知見をまとめると、第1に、最初の序文からグループ・ディスカッションを経て書いた中間論文では、問題設定に関する記述のレベルは明らかに向上した。とくに、漠然とした問題関心から問いを絞り込む、問題を「明確化」する点は着実に上昇した。第2に、これに対して、問いの意義を他者に納得させるように示す、いわば問題の「普遍化」という点ではやや伸び悩みをみせた。また、思い込みや先行研究などを批判的に吟味しながら問いをとらえなおす、問題の「相対化」の面は得点に結びつきにくく、学生間で点数にばらつきがみられた。第3に、ディスカッションの結果を各自でワークシートにまとめる際に、ブログを用いたクラスは紙を用いたクラスよりも学生間の得点の開きが小さく、平均点もわずかだが上回った。また、ブログのクラスでは、ワークシートにおいて他者のコメントを自分なりに再構成した記述や議論からの気づきなどのメタ的な記述がきわめて多く、問題設定の絞込み、多様な視点の理解、気づきなどに関連する単語の出現数が多かった。第4に、ブログを積極的に利用して全体的に得点を伸ばした学生は、自分のブログおよび他の学生のブログのページ表示回数が顕著に多く、比較的コンスタントにアクセスし、また、他の学生のブログに訪れる回数を徐々に増やしていった。

以上の結果から、ディスカッションを通じて他者の多様な見解にふれて自分の論文を振り返ることは、問題設定のプロセスにおいて有効なことが明らかになった、とくに、ブログの利用は、時間をおいて授業内の議論を見直すとともに、他者の論文やコメントなどを参照しながら、自分の考えを吟味する機会を増大させたという点で効果を促進したと考えられる。このように、学びあいをその場だけで終わらずに個別に振り返らせる仕掛けを取り入れることも必要ではないだろうか。また、学びあいによって比較的順調に伸びていく力とそうでない力があることも確認できた。繰り返しとなるが、こうした教育効果に応じて学士課程教育全体のプログラムを設計し、そのなかに初年次教育を位置づけることが重要といえよう。（報告内容の詳細や参考文献については、パワーポイント資料を参照。）

## 学士課程教育における 初年次教育の位置づけ

杉谷祐美子  
(青山学院大学教育人間科学部)

2010年3月7日(日)  
(財)大学コンソーシアム京都 第15回FDフォーラム  
第1分科会:「2年次以降につながる初年次教育」

1

## 1. はじめに

- 2006年度 初年次教育を実施する大学 約71%  
(文部科学省 2008)
- 2001年以降の初年次教育の拡大普遍化と発展  
学会の創設、各種フォーラム、各種調査等



### 「第2ステージ」を迎えた初年次教育

- 啓蒙・導入期を経て、各大学における多様な実践活動が蓄積されつつある
- より具体性を帯びた新たな課題が表面化

2

## 本報告の構成

1. はじめに
2. 初年次教育のニーズと課題
3. 初年次教育の到達目標と効果的取り組み
4. 学びあいによる授業実践
5. まとめ

学士課程教育における初年次教育の  
位置づけを検討することの重要性

3

## 2. 初年次教育のニーズと課題

- 2001年調査  
日本私立大学協会附属私学高等教育研究所  
「効果的導入教育カリキュラムの開発」研究  
(研究代表者: 山田礼子)  
実施時期 2001年11月  
対象 私立大学全1170学部  
回答 636学部(回収率: 54.4%)
- 2007年調査  
国立教育政策研究所  
+ 私学高等教育研究所導入教育研究グループ  
「大学における初年次教育に関する調査」  
実施時期 2007年12月  
対象 国公立大学全1980学部  
回答 1419学部(回収率: 71.7%)

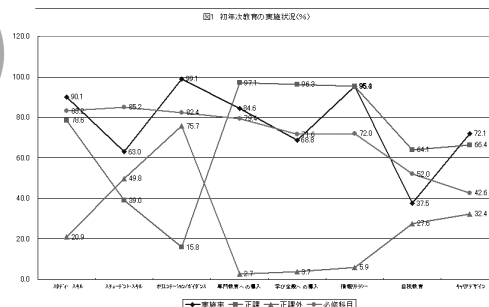
4

## 初年次教育の領域：2007年調査

- ①スタディ・スキル系  
(レポートの書き方、図書館の利用法、プレゼンテーション等)
- ②チューデント・スキル系  
(学生に必要な一般常識や態度、時間管理や学習習慣、健康管理等)
- ③オリエンテーションやガイダンス  
(フレッシュマンセミナー、履修案内、諸手続きや登録等)
- ④専門教育への導入  
(専門への橋渡しとなる基礎的知識・技能の教育、専門基礎演習等)
- ⑤教養ゼミや総合演習など、学び全般への導入を目的とするもの
- ⑥情報リテラシー  
(コンピュータリテラシー、情報処理等)
- ⑦自校教育  
(自大学の歴史や沿革、社会的役割等)
- ⑧キャリアデザイン  
(将来の職業生活や進路選択への動機づけ、自己分析等)

5

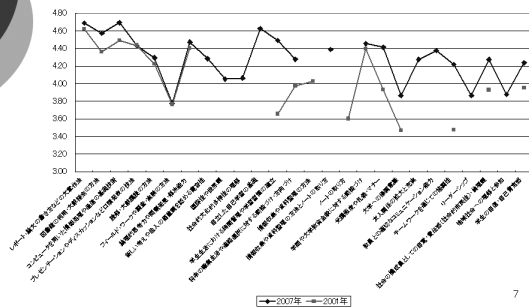
## 領域別の実施状況：2007年



6

## 重視する内容：2001年－2007年

図2 初年次教育で重視する内容(割合による平均値)



### ○ 領域別の実施状況：2007年(図1)

- オリエンテーションやガイダンスの実施率はきわめて高いが、「フレッシュマンセミナー」などの授業科目として位置づけられているケースはまだ少ない
- 正課としては主に、スタディ・スキル系、専門教育への導入、学び全般への導入の授業科目が設置
- スチューデント・スキル系の内容は実施率も正課教育への導入率も相対的に低い

### ○ 重視する内容：2001年－2007年(図2)

- 2001年からの全体的な上昇
- スチューデント・スキルは顕著

## 2007年調査：実施上の課題・要望

01年調査から続く課題

新たな課題

- 学生の学力不足・格差
- 学生の目的意識、(学習)意欲、学習・生活習慣の欠如
- 担当教員間の熱意や指導力のばらつき
- 教員間の連携の不足
- 目的・内容・水準・評価等に関する合意形成の困難
- 初年次教育の多様なコンテンツの整理・プログラムの総合化
- 年度当初だけでなく通年のフォロー、次年度以降との接続
- 具体的成果・達成度の客観的評価の開発
- 学生を甘やかさない円滑な移行
- 先進的事例・学生の適応過程に関する情報提供(cf.専門機関)
- 教員の負担増(人的裏づけ・財政支援)
- 高校の現状把握(高校との情報交換)

### 3. 初年次教育の到達目標と効果的取り組み

- 「第2ステージ」を迎えた初年次教育の課題
- = 初年次教育プログラムの内容・方法の検討と精選
  - スチューデント・スキルに関する指導方法の導入
  - 多様なコンテンツを整理統合した総合的なプログラムの開発
  - 通年にわたるフォローや次年度以降の教育との接続

学士課程教育全体の構造化と初年次教育の位置づけと役割の明確な設計

その到達目標に応じたプログラムの構築

## 初年次教育の到達目標

- 「学士課程教育」とは、何をどこまで達成すればよいのか？
  - ある程度の共通性は必要だろうが、各大学の特色や学部学科の特性によって独自の目標を設定することが重要
- 初年次教育とは？
  - 「高校(と他大学)からの円滑な移行を図り、学習および人格的な成長に向けて大学での学問的・社会的な諸経験を“成功”させるべく、主に大学新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム」(濱名・川嶋 2006)
- 「接続関係」(articulation)とは？
  - 「分節」「関節」「継ぎ目」「接合」
  - 連続と断絶が前提

- 主要な到達目標
  - 高校と大学との違いを理解する
  - 学習観・学習態度の転換(受身から能動へ)
  - 学ぶことの意義を理解する
- スチューデント・スキルに相当する到達目標
  - 自分の位置を把握して、自分の必要な学習ができる
  - 目標を立てる
  - 学習計画を立てる
  - 卒業までのスケジューリングができる
  - ものごとに取り組む力・意欲の育成
  - 他人と協力して最後まで成しとげる
  - 人間関係を築く
  - 倫理観・マナーを身につける  
(初年次教育学会第1回大会ワークショップ、2008年)

# 初年次教育プログラムの内容や方法に関する問題点

- 「スタディスキルとスチューデントスキルの連関」
- 「自発的に学修することを目指しているが、学生の「積極的な学び」が引き出せない」
- 「学生が受け身になりやすい場面もあるのではないか。そのため学習した内容の継続性が難しいところもあるのではないか。」
- 「学生の総合的把握という視点が不足しているのではないか」
- 「スキルの部分が多いので、学生の精神や心の問題についてふれるべきである」

(初年次教育学会第1回大会ワークショップ、2008年)

13

## ○ベネッセ教育研究開発センター

### 「大学生の学習・生活実態調査」

(主査:山田礼子)

実施時期 2008年10月上旬  
対象 全国の大学1～4年生  
回答 4,070名(母集団の構成に近似)  
方法 インターネット調査  
分析対象 大学1年生1,107名

14

表1 大学における学習への取り組みの因子分析結果(Promax回転後の因子パターン)

|                                    | I    | II   | III  | IV   | V    |
|------------------------------------|------|------|------|------|------|
| 12 グループワークやディスカッションでは、積極的に参加する     | .96  | .04  | -.02 | -.03 | -.26 |
| 11 グループワークやディスカッションで自分の意見を言う       | .94  | .03  | .04  | -.07 | -.07 |
| 13 グループワークやディスカッションでは、進んで意見を述べる    | .90  | -.06 | -.07 | .06  | -.09 |
| 14 グループワークやディスカッションでは、異な意見や立場に配慮する | .76  | .04  | .13  | -.03 | -.09 |
| 10 クラス活動の前で、積極的に質問や発言をする           | .53  | -.10 | -.08 | .07  | .38  |
| 2 授業中に必要な資料、資料、ノートなどを毎回持ち来る        | -.08 | .75  | .01  | -.16 | .03  |
| 3 授業中に必要な資料、資料、ノートなどを毎回持ち来る        | -.08 | .74  | -.18 | -.06 | .16  |
| 8 授業で出された宿題や課題をきちんとやる              | .06  | .71  | -.01 | .01  | -.04 |
| 4 授業で出された宿題や課題をきちんとやる              | .05  | .71  | -.19 | .10  | -.23 |
| 9 レポートやプリントを提出する前に見直す              | -.08 | .55  | .14  | .04  | -.09 |
| 25 でもおぼろしい程度に読んでみる                 | .03  | .49  | -.04 | .29  | .01  |
| 5 授業中は積極的に参加する(積極的に発言する)           | .10  | .43  | .13  | -.02 | .14  |
| 18 授業で配布された資料などを整理する               | .00  | .36  | .22  | .09  | -.05 |
| 6 授業中にメモを取る                        | -.09 | .36  | .12  | -.14 | .18  |
| 17 授業で配布された資料について自主的に勉強する          | .01  | -.12 | .09  | -.03 | .06  |
| 19 授業とは関係なく、興味をもったことについて自主的に勉強する   | .07  | -.09 | .76  | .05  | -.09 |
| 16 授業とは関係なく、興味をもったことについて自主的に勉強する   | -.07 | .08  | .61  | -.04 | .24  |
| 23 計画を立てて勉強する                      | -.05 | .01  | -.04 | .52  | .03  |
| 24 自分の意思で積極的に勉強する                  | -.02 | .06  | .20  | .67  | -.01 |
| 22 本業以外の学習のために勉強する                 | .02  | -.27 | -.11 | .48  | .26  |
| 21 資格や免許の取得のために勉強する                | .03  | .12  | .05  | .48  | -.07 |
| 1 授業の手習いをする                        | -.03 | .11  | -.03 | .05  | .05  |
| 15 授業の手習いをする                       | -.07 | .07  | .17  | .07  | .63  |
| 7 授業で配布された資料をきちんと整理する              | .26  | .06  | .06  | .05  | .44  |

|        |      |      |      |      |   |
|--------|------|------|------|------|---|
| 因子間の相関 | I    | II   | III  | IV   | V |
| I      | 1    |      |      |      |   |
| II     | -.29 | 1    |      |      |   |
| III    | -.01 | -.01 | 1    |      |   |
| IV     | -.01 | -.01 | -.01 | 1    |   |
| V      | -.01 | -.01 | -.01 | -.01 | 1 |

15

## 学習への取り組み(表1)

### ○大学における学習への取り組み26項目の因子分析結果(主因子法、Promax回転)

「全くあてはまらない(1)」～「とてもあてはまる(4)」の4件法の回答。ただし、十分な因子負荷量を示さなかった2項目は除外。

### ○5つの因子を析出

- I ディスカッション等への貢献
- II 受講の基本的マナーの遵守
- III 興味に基づいた自主学習
- IV 計画的・継続的自主学習
- V 授業の予習・復習

16

表2 大学での授業経験と大学での学習への取り組み(初年次低群の学生)

|                 | I ディスカッション等への貢献 |             | II 受講の基本的マナーの遵守 |              | III 興味に基づいた自主学習 |             | IV 計画的・継続的自主学習 |             | V 授業の予習・復習  |             |
|-----------------|-----------------|-------------|-----------------|--------------|-----------------|-------------|----------------|-------------|-------------|-------------|
|                 | 多い              | 少ない         | 多い              | 少ない          | 多い              | 少ない         | 多い             | 少ない         | 多い          | 少ない         |
| 授業経験            | 10.16 (3.40)    | 9.79 (3.40) | 27.48 (4.52)    | 26.58 (3.30) | 7.46 (2.00)     | 7.50 (2.29) | 8.21 (2.40)    | 7.92 (2.52) | 4.24 (0.81) | 5.31 (0.81) |
| 勉強方法の授業         | 10.30 (3.44)    | 9.73 (3.40) | 27.38 (4.48)    | 26.67 (3.32) | 7.82 (2.23)     | 7.34 (2.16) | 8.44 (2.62)    | 7.83 (2.42) | 4.46 (0.89) | 5.15 (0.87) |
| 少人数ゼミ・演習        | 10.55 (3.37)    | 9.31 (3.37) | 27.18 (4.58)    | 26.62 (3.30) | 7.61 (2.17)     | 7.38 (2.22) | 8.33 (2.50)    | 7.73 (2.47) | 4.68 (0.89) | 5.19 (0.86) |
| グループワーク等の導入     | 11.03 (3.40)    | 9.05 (3.17) | 27.53 (4.80)    | 26.40 (3.37) | 7.70 (2.19)     | 7.32 (2.19) | 8.24 (2.53)    | 7.85 (2.46) | 4.39 (0.81) | 5.36 (0.76) |
| ディカッションの導入      | 11.41 (3.31)    | 9.07 (3.20) | 27.43 (4.80)    | 26.59 (3.21) | 7.89 (2.30)     | 7.28 (2.11) | 8.50 (2.48)    | 7.75 (2.47) | 3.99 (0.67) | 5.47 (0.82) |
| グループワーク等の導入     | 11.19 (3.26)    | 9.11 (3.28) | 27.53 (4.82)    | 26.50 (3.31) | 7.81 (2.20)     | 7.29 (2.17) | 8.44 (2.40)    | 7.76 (2.50) | 4.42 (0.83) | 5.27 (0.82) |
| 教員と学生のコミュニケーション | 11.08 (3.40)    | 9.28 (3.27) | 27.43 (4.80)    | 26.61 (3.34) | 8.08 (2.13)     | 7.17 (2.16) | 8.61 (2.48)    | 7.70 (2.45) | 4.01 (0.70) | 5.44 (0.85) |
| 学生の意見・質問の尊重     | 11.00 (3.25)    | 9.35 (3.38) | 27.80 (4.88)    | 26.36 (3.48) | 8.05 (2.14)     | 7.20 (2.27) | 8.71 (2.59)    | 7.67 (2.48) | 4.48 (0.85) | 5.17 (0.85) |

注「多い」「少ない」とある項目の合計「多い」「少ない」の合計は17.00である。\*\*\* p<.001

17

## 大学での授業経験と学習への取り組み(表2)

○高校での学習態度11項目の合計値によって、学生を二分。中央値27を基準に、28以上を「高群」、27以下を「低群」と分類。初年次生は、高群478名、低群539名。学習態度が相対的に身につけていない低群を対象に、下位尺度得点を比較。

- 演習やアクティブ・ラーニング、コミュニケーションを図る授業経験が多い学生ほど、学習態度I、III、IVを中心に平均値が高い。
- 補習授業の経験はこれらの態度の値に影響はなく、学習態度Vはどのような授業経験とも負の相関。

勉強方法の授業経験もやや影響がみられるが、講義にとどまらず、演習・実践の機会を多く伴う工夫が必要。学びあいやコミュニケーションも重要。

18



#### 4. 学びあいによる授業実践

- 授業「基礎演習」の概要
  - 教育学科の共通基礎科目
  - 教育学科初年次生必修・前期開講
  - 演習形式（1クラス20～25名）
- 担当者の授業と目標
  - 自分の興味関心のある教育問題について、4000字程度の論文を書く
  - 論文作成において自ら「問い」「考え」、学びあいから「気づく」ことを通じて、大学での学びの姿勢を少しでも身につける
    - 問いを明確にして探究する姿勢
    - 事実に基づいて考察する姿勢
    - 自分の考えを相対化する姿勢

19

- 学士課程教育における位置づけ
  - 高年次のゼミ論や卒業論文を視野に入れつつ、論文の基本的な書き方と大学での学びの姿勢の習得を目指す
- 授業の特徴と研究の内容
  - 自ら問題を発見し、問題を設定するプロセスに注目
  - 授業内外の協調的学習環境が与える影響を研究
    - 授業内 グループ・ディスカッション（論文の検討）
    - 授業外 学生個人用のblog（課題の提出・コメント）

※2007年度は2クラス中1クラスのみblogを利用

20

| 回数   | 月日    | テーマ           | 提出物    | 議論の対象とメンバー   |
|------|-------|---------------|--------|--------------|
| ①    | 4月12日 | オリエンテーション     |        |              |
| ②    | 4月19日 | 図書館の利用        |        |              |
| ③    | 4月26日 | ブログの利用        |        |              |
| ④    | 5月10日 | 論文の読み・書きの注意①  | 文献表    |              |
| ⑤    | 5月17日 | 先行研究の検討（議論）   | 文献レビュー | 文獻レビュー 自グループ |
| ⑥    | 5月24日 | 論文の書き方        |        |              |
| ⑦    | 5月31日 | 問題設定（議論）      | 序文     | 序文 自グループ     |
| ⑧    | 6月7日  | 論文の読み・書きの注意②  |        |              |
| ⑨    | 6月14日 | アウトラインの作成（議論） | 序文     | 他グループ        |
| ⑩    | 6月21日 | プレゼンテーションの技法  |        |              |
| ⑪    | 6月28日 | アウトラインの発表（1）  | 中間論文   | 論文概要 クラス     |
| ⑫    | 7月5日  | アウトラインの発表（2）  |        |              |
| ⑬    | 7月12日 | アウトラインの発表（3）  | 論文概要   | クラス          |
| 夏季休業 |       |               | 完成論文   |              |

（杉谷・長田・小林 2009, p.93）

21

#### 序文の発展

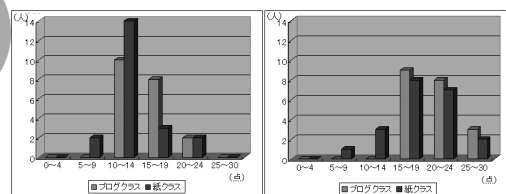


図3 序文（第7回）の総合点

図4 中間論文（第11回）の総合点

（杉谷・長田・小林 2009, pp.98-99）

22

- グループ・ディスカッションを挟み、序文から中間論文にかけて、問題設定の記述は向上。
- とくに、ブログクラスは学生間の得点差が小さく、平均点も紙クラスを若干上回る。
- 項目別得点では、
  - 問題の「明確化」 着実に上昇
  - 問題の「普遍化」 やや伸び悩み
  - 問題の「相対化」 得点に結びつきにくく、学生間で点数がばらつく

23

#### ワークシートにみる気づき

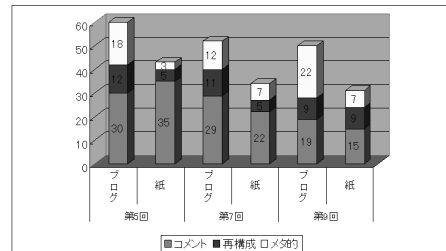


図5 ワークシートの記述項目数

（杉谷・長田・小林 2009, p.104）

24

- ブログクラスのワークシート
    - 記述項目数が多い。
    - 再構成の記述やメタ的記述がきわめて多い。
    - 問題設定の絞り込み、多様な視点の理解、気づきに関する語が多い。
  - ブログを積極的に利用して得点を伸ばした学生
    - 自分のブログ・他の学生のブログのページ表示回数が顕著に多い。
    - 比較的コンスタントにアクセス
    - 他の学生のブログに訪れる回数が徐々に増加。
- ↓
- ディスカッションを通じて他者の多様な見解にふれ、自分の論文を振り返ることは有効。
  - ブログは、時間をおいて授業内の議論を見直し、他者の論文や意見を参照しながら、自分の考えを吟味する機会となる。

25

## 5. まとめ

- スチューデント・スキルに対応する初年次教育の実施率はやや低い、ニーズは増大
- 「第2ステージ」の課題は、初年次教育プログラムの内容・方法の検討と精選
- 学士課程教育全体の構造化と、初年次教育の位置づけと役割の明確な設計の検討
- 初年次教育の主要な到達目標は、大学生にふさわしい能動的な学習態度への転換
- 能動的な学習態度の形成には、アクティブ・ラーニング、学びあい、コミュニケーションが重要
- 学びあいをその場だけで終わらせずに、個別に振り返らせる仕掛けづくりも有効
- 教育実践と教育効果(順調に伸びる力、そうでない力)に応じて、学士課程教育全体のプログラムを設計する必要

26

## 参考文献

- 濱名篤・川嶋太津夫(編著)(2006)『初年次教育－歴史・理論・実践と世界の動向－』丸善株式会社
- 小林至道・杉谷祐美子(2009)「6章 ブログの積極的利用・継続的利用が促す問題への振り返り」鈴木宏昭編『学びあいが生み出す書く力 大学におけるレポートライティング教育の試み』(青山学院大学総合研究所叢書)丸善プラネット株式会社、pp.113-132
- 文部科学省(2008)「大学における教育内容等の改革状況について」([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/20/06/08061617.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/06/08061617.htm))
- 杉谷祐美子(2009)「第3章第1節 大学生の学習状況」山田礼子・杉谷祐美子他(共著)『大学生の学習・生活実態調査報告書』(研究所報VOL.51)ベネッセコーポレーション、pp.80-99

27

## 参考文献

- 杉谷祐美子(2009)「初年次教育『第2ステージ』へー実践と結びついた研究への期待ー」(アルカディア学報387)『教育学術新聞』第2321号、p.2
- 杉谷祐美子(2009)「総合的初年次教育プログラムの開発に向けてーワークショップにおける調査からの考察ー」『初年次教育学会誌』第2巻第1号、pp.40-47
- 杉谷祐美子(2009)「『問い』を深化させる レポートライティング教育の試み」(アルカディア学報387)『教育学術新聞』第2382号、p.2
- 杉谷祐美子・長田尚子・小林至道(2009)「5章 協調学習を通じた気づきと問題設定の深まり」鈴木宏昭編『学びあいが生み出す書く力 大学におけるレポートライティング教育の試み』(青山学院大学総合研究所叢書)丸善プラネット株式会社、pp.87-112

28